

大江戸ホラー

留学生 お岩稲荷と 上野の山を行く

11月19日、恒例の国際交流センター主催の秋季都内見学ツアーが行われた。今回は「大江戸ホラーツアー」。日本のホラーが留学生の目にとどくように興味を抱いていたら、女性の参加者が多かったのには、ちよつぱり驚いた。

(学生記者・白瀧ちるみ)

午前10時、JR中央線の四谷駅に集合。西念寺で「葬式の見学」となった。ここは忍者のボス、服部半蔵が家康から賜った槍や墓がある寺。午前中のせい、葬式の準備が出来上がったところを見る。案内役は講師の神田陽司さん。留学生中心のツアーなので、英語を交えて、ゆっくりとした口調で説明していた。

この日は「寒さの方が怖かった」という人が多かったほど、肌寒い一日だったが、フランスの留学生に「幽

霊やおばけはフランスにもあるか」と聞いたところ、「ないです」との返事。彼らは幽霊やおばけを日本文化の一つとみているという印象を受けた。

次は、江戸時代から続く「西の市」のある須賀神社へ。さつそく、しめ縄の説明を受けた。しめ縄は縄の部分が雲を表し、縄から下げられた菱形に切った紙の部分は雷で、秋の天気を表す。つまり、収穫のシンボルである。留学生以上に、こちらが勉強させられた。

いよいよ「お岩稲荷」。お岩様としてこの地が有名となったのは1825年の鶴屋南北の「東海道四谷怪

談」から。そのいわれも初めて聞く

ものだった。お岩稲荷を出たら、例の神田さんが幽霊画集を見せてくださった。女性の幽霊画を「怖いなあ」といしながら見ていたら、中国の男子学生が「いいねえ」と面白そうに

いったのには笑った。今度は四谷三丁目から地下鉄で上野広小路に出る。すぐ近くの上野広小路亭で昼食をとりながら、お互いに自己紹介。その後、ここで幽霊

晰ぼんやりの講談と落語の鑑賞会を楽しむ。落語はテレビやラジオで辛うじて触れているが、講談の方はまったく接する機会がなかったので、間近に聞けるだけで大感激した。留学生に

話が通じやすいようにと、昔の言葉を余り使わないよう配慮されたことが少し物足りない気もしたが、実はその配慮が、私たち日本人学生のためのものではないかと思えるほど役に立った。

講談は張り扇せんを使い、円山応挙という画家の描いた幽霊の話で皆しみり。パーンパンパンと、張り扇を叩く音が響きわたった。次の落語では桂米二郎さんによる、ウドンやソバの食べ方の表現方法をたくさん見せていただいた。いよいよ本番の出し物「皿屋敷」が始まった。落語では幽霊話が明るい話が変わってしまふ。笑いこけたせい、いままでの怖かった見学の雰囲気が変わってしまった。

午後は上野史跡巡り。先ず、不忍池のほとりに立つ下町風俗資料館。明治・大正の下町の情景、例えば商店の店先や長屋などが実物大で出来ている。長屋の井戸のところで、フランスの留学生に「これが一枚、二

幽霊話より寒さの方が怖かった?!



〔上〕西念寺の境内を見学する
 〔右〕四谷怪談で有名なお岩稲荷
 〔左〕落語では一転、幽霊話が明るく

枚、三枚……」の(皿屋敷の)井戸
 だ、と説明すると、納得の様子だっ
 た。また、商家にあったソロバンを
 手にした中国の留学生が「中国にも
 あります」といって、ソロバン玉を
 はじいていた。
 ここから西郷隆盛像、彰義隊の墓
 五重塔、東照宮と回ったが、ちょ
 うど紅葉真っ盛りの時期で、どこも
 人が多かった。